

図書館に戻る

語学教育センター フィゲロア アンヘル

大学の図書館に入ると思い出が溢れてきた。それはいくつかの単純な動作によって引き起こされた。まず、IDカードでセンサーに触れると、ピープ音とともに電子ゲートが開いた。平凡ではあるが、昔、学生だったころに感じた、選ばれたメンバーだけが知識や学問を学べる魔法のような場所への敷居をまたぐ感覚を思い起こさせた。そして、厚く柔らかいカーペットを踏みしめ、小さなテーブルに整然と並べられた本が心地よい歓迎の言葉をかけてくれた。3階建ての1階部分が目の前に広がり、本の高い柱が読書用のテーブルを挟んでいる。温かみがあり、なじみのある光景だった。上からは蛍光灯が涼しげな光を放ち、すべてがきらきらと清潔に、そして正確に整理整頓されているように見え、散らばって勉強に集中する孤独な学生たちに静かな勉強と集中のムードを与えていた。私はこの感覚をよく知っていた。これらの感覚が静寂と混ざり合い、肩の力を抜き、目の前の課題に集中する火花を散らし、雑念から身を守る。とても心地よかったが、大学生だったころに慣れ親しんだ場所に戻ってきたような非現実的な気分でもあった。私は、昔学んだアルゼンチンの作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスの「楽園は一種の図書館である」という言葉を思い出した。

これらの思い出に共通するモチーフは本である。私は本とともに育ってきたが、単に読書が好きだったというだけではない。私の一番古い記憶には、父がいつも本を読んでいる姿があった。家のあちこちに本があり、父の仕事場にも本があった。父が実際に本を使って仕事をしていたことは、私にとって驚きではなかった。彼の生活のいたるところに、いつも本があった。彼は大学の図書館員で、最初は目録係、次に参考文献係だった。

私は幼い頃から図書館に慣れ親しんだ。父の職場と地元の公共図書館の間で、私はヨーロッパのコミックアルバムや図鑑、19世紀のロシア文学や20世紀のイギリス文学など、さまざまな分野に没頭する喜びを知った。ファンタジーやSF小説—10代のよくある逃避—も私に影響を与えた。こうして大学生になるまでに数え切れないほどの時間を図書館で過ごし、深い影響と新進の知識を得た——ベルギーのジャーナリスト・タンタンの世界、ヨーロッパのヴィンテージ切手、マヤの象形文字、ドストエフスキーやグレアム・グリーンに興味深い人物洞察、J.R.R.トールキンやイアン・M・バンクスの素晴らしい世界などだ。

その後、私は大学生となり、歴史学、ラテンアメリカ文学、言語学などを学ぶために図書館を訪れるようになった。

おそらく、国や環境に関係なく、図書館には普遍的なルールがあるのだろう。それは、心を開き、深く集中し、時間をかけて相互に関連する知識を深めていくことができる、平和で落ち着ける場所であるということだ。(もちろん、学べば学ぶほど、さまざまな分野にわたる自分の膨大な不慣れさに気づくことに

なるのだが)。

学生ではなく助教として、私が入ろうとしている大学図書館は、私が育った図書館から地球を半周したところにあるが、それほど変わりはない。時間が止まったような心地よい、我が家のような感覚である。

数年前に採用されて以来、図書館にあまり足を運んでいなかったのは、なんとも皮肉なことだった。こんな慣れ親しんだ環境であれば、私は受け入れていただろうと思う。しかし逆に、私はそうしなかった。理由はすぐに明らかになった。図書館の入り口を通るたびに、父のこと、幼いころのこと、本が好きだったこと、大学生だったころのことが思い出され、ほろ苦い郷愁の壁が立ちはだかり、図書館に入ろうとしなかったのだ。その理由は何だったのだろうか？ 最近亡くなった父との思い出の強さが関係しているのだろう。

ようやく図書館を訪れる理由ができたとき、ノスタルジーは解け、楽しい再会のようなものを発見した。私の研究に必要な雑誌記事が、学術データベースでしか入手できないことを知ったのだ。図書館に入ったときの視覚的な合図が、「図書館体験」に対する私の好意を再び呼び覚ますのに役立ったが、私が論文の検索語を入力したコンピューター・コンソールでの出来事によって、それはさらに強調された。画面に表示される書誌データを、私は小さな紙に書き写した。紙に鉛筆で書き写す音は、私の耳に音楽のように響いた。それを図書館員に見せたところ、数分で PDF を提供してくれた。私は感謝し、感激し、元気を取り戻し、次の訪問を心待ちにしている。